

23 日本で最初の仏和辞典 (2021年1月7日)

昨年、フランス国立極東学院 (EFE0: Ecole Française d'Extrême-Orient) を訪問する機会がありました。EFE0は、1898年に仏領インドシナのサイゴン (現在のホーチミン) に設立されたインドシナ考古調査団を前身とし、1901年にハノイに移転し、現在はパリに本部があります。日本、中国、朝鮮半島、東南アジア、インド等の12の国と地域を対象とする研究機関で、日本の京都と東京を含めて各地に支部を持っています。

EFE0の図書館は、日本の古い書物を数多く所蔵しています。その中に、日本で最初の本格的な仏和辞典である「佛語明要」があります。これは、江戸時代と明治時代を生きたフランス学者の村上英俊 (1811-1890) が編纂し、1864年に発行されました。全部で4巻あり、語彙数は35000語にのぼります。「achalander (店商ヲスル)」や「âcre (辛辣ナル)」といった言葉を確認できます。



江戸時代に日本が鎖国をしていた間、ヨーロッパの学術、文化や技術は、交易が認められていたオランダを通じて日本に入ってきました。ある研究者の論文によると、村上英俊は、1846年頃に兵学者の佐久間象山から、兵器の能力強化に役立つ書物を紹介してもらいたいと相談を受け、スウェーデン人化学者のイェンス・ヤコブ・ベルセリウス (Jöns Jacob Berzelius) が著した化学書を推薦しました。その書物を発注して英俊の手元に届いたものは、英俊が解するオランダ語ではなくフランス語で書かれていました。医師でもあり、化学にも造詣の深かった英俊は、象山に後押しされて、1848年頃からオランダ語で書かれたフランス語の文法書や仏蘭辞書を使って、独学でフランス語の勉強を始めました。努力を重ね、「佛語明要」を始めとするフランス語関連の書物やフランス語の書物の和訳を出版しました。「佛語明要」は幕末以降に国内で広く使われ、「達理堂」というフランス語塾を開設して後進の育成にも力を尽くしたことから、英俊はフランス学の始祖と言われます。

## パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

1885年（明治18年）には、フランス政府からレジオンドヌール勲章シュヴァリエを叙勲されました。おそらく、英俊はレジオンドヌール勲章を叙勲された初めての日本人ではないかと考えられます。

現代の日本人が辞書を使ってフランス語の勉強をすることができるのは、英俊のような先人たちの努力があったおかげなのです。